

絆で育む地球市民:次世代へつなぐ安全安心なまちづくり

特定非営利活動法人 エクスプローラー北海道

【子どもたちが楽しく平和な未来を目指して】

エクスプローラー北海道は、「子どもたちを地球市民として育て、平和な多文化共生社会を実現する」という理念のもと、2005年8月に設立しました。自身の留学や通訳の経験を通じ、地方の小さな町で育つ子どもたちであっても、自分が世界に影響を与える存在であることを実感しながら成長することを願う仲間たちと共に、地域から全国へ、そして未来へと活動を広げてきました。

各取組みは、「平和」と「未来」という共通のビジョンに基づき、信念と柔軟なアプローチを携え、人々と協力しながら前進してきました。法人名に入れた「北海道」には、ここから全国へ発信し、新たな挑戦を想起させるためです。これまでに展開した数々の事業は、全国的な先進事例として注目を集める一方で、地元や道内にはなかなか理解が広がらず、一部では“お母さんたちの趣味の集まり”とみられたこともありました。しかし、理解者や協力者に支えられ、積み重ねた成果によって得た全国的評価は、地元での存在感強化につながりました。

【母親たちの願いから発展した活動プログラム】

苫小牧市で子育てを始めた頃、幼稚園の母親たちから「子どもに英語を教えてほしい」と頼まれ、親子で学べる国際理解プログラムを開発し提案。このプログラムは2002年から10年間続き、延べ2,000名の親子に継承されました。親を巻き込むことで親子共にグローバルな視野が芽生え、自己成長と楽しみを味わうようになり、その結果、地球市民の倍増につながっています。



インターナショナルタイムは英語に限らず世界を楽しむプログラムとして2002年～2012年まで2つの幼稚園で毎月実施

【防犯・防災教育の充実】

NPOの設立準備中、全国では子どもの犯罪被害が相次いでいました。大人が守るだけでなく、子ども自身が守る力を身に付け、世界中どこにいても安心して過ごし、さらに他者を守る存在へと成長してほしいという願いを込め、定款には「子どもの安全」が明記されています。

防犯教育は設立以来、ニーズの高い柱になっています。守られる存在としての子どもを、地域を共に築くパートナーとして育てる視点で防犯教育を導入しています。「地域安全マップづくり」は、単なる物理的な地図制作が目的ではなく、犯罪被害を防ぐためのスキルを身に付ける学習プログラムです。その最大効果を得るには、保護者を含む地域住民が「指導者」となり、子どもたちと共に学ぶことが不可欠でした。こうして正しい知識と指導力が次世代へ継承され、防犯意識は地域全体に根付き始めました。

さらに、東日本大震災や胆振東部地震を経て、防災教育への関心も高まり、防犯教育同様、子どもと地域の大人たちが共に取り組む防災プログラム「町内子ども防災士3級」を開発しました。また、町内会からの委託で、敬老の日に高齢者向け防災グッズを開発しました。実用新案を取得した「切り取り式防災ふろしき」や、迷わず最低限のグッズをいつも携帯できる「イッケー10ポーチ」など、高齢者が日常の延長で防災意識を高められる工夫を凝らしています。年齢に関わらず、防犯・防災はもはや特別な訓練ではなく、日常生活に根付く躰や素養、そして地域文化の一つであるといえます。



地域安全マップづくりの取組み（児童向け指導・養成講座・iPadを利用によるデジタル化）

2021年以降、子どもゆめ基金の助成を受けて2年続けて、防犯関連のデジタル教材を開発しています。「地域安全マップづくり指導者養成プログラム」や「地域安全マスタープログラム」によって、子どもたちは楽しみながら地域安全や防犯を学べます。これらの教材には、幼い頃から地域安全マップづくりや、日本で唯一、苫小牧で行われている安全な通学活動「ウォーキングバス」に参加してきた高校生が描いたイラストや漫画を採用。経験者ならではの視点に加わることで、子どもたちにより伝わりやすい内容となっています。



苫小牧市拓勇地区ウォーキングバス

【環境教育への多角的アプローチ】

20年以上ソーラーカー大会の通訳を務めた経験から、エネルギー問題が子どもたちの将来に直結することを肌で感じてきました。その気づきを活かし、大手ショッピングセンターの「環境活動クラブ」と連携し、独自の環境学習プログラムを毎年創り上げ、18年間で延べ500名以上の苫小牧の子どもたちを指導してきました。

代表メンバーは毎年全国大会で入賞し、ドイツや沖縄へのツアーを勝ち取るなど成果を上げています。こうした経験は、地方の子どもたちにも地域を超えた視野と友情を育み、他者を思いやる心を育む契機にもなっています。



イオン苫小牧チアーズクラブ活動発表

【多文化共生の推進と地域交流の深化】

「国際交流団体」と名乗ってはいませんが、外国人との活動や英語を活用した発信によってアメリカの非営利団体より、非主流派米国高校生の夏休みホームステイプログラムの企画・運営を10年間委託され、苫小牧市内や近隣町の有志がホストファミリーを務め、毎夏十数名の高校生を受け入れています。この取り組みは単なるホームステイに留まらず、老人クラブでの餅つきや小学校での英語授業サポートなど多面的な「苫小牧プログラム」として米国側からも高く評価され、ホスト希望者も年々増

加しています。

今年は「マルチカルチャー×クロスカルチャー」をテーマに、外国人青年と子どもたちがアイヌ文化を学び、その経験をSNSで発信する試みも実施。「私」と「あなた」の違いや共通点に加え、別の文化が交差することでどのような気づきを得られるのか。異なる文化背景を持つ人々と共に学び体験する営みは、異文化理解を深め、世界との新たな接点を子どもたちに示しています。

【まちづくりへのシフトと先進事例としての評価】

幼稚園児と母親たちへの小さな国際理解プログラムから出発した活動は、子どもの安全、防犯・防災教育、環境への取り組み、さらには多文化共生へと段階的に広がり、20年を経て総合的な「まちづくり支援」へと発展しました。こうした経験やノウハウは、少子高齢化が進む中、地域活動を持続可能なものへと導く先進事例として、全国各地から注目を集め、視察や講演の依頼も相次いでいます。20年前、「北海道から全国へ発信できれば」と思い描いていた姿がいま現実となり、その展開に新鮮な驚きを感じているところです。

【コロナ禍とデジタル化による地域強化】

コロナ禍では、リアルな交流が制約され、オンライン会議や郵送による企画を実施。デジタル機器に不慣れた高齢者へのiPad活用支援など、新たなアプローチを次々に導入しました。AIを用いた日常生活サポートや、町内会費コンビニ払い、名簿管理システムといった利便性向上策は、地域参加へのハードルを下げ、コミュニティの活性化を後押ししています。デジタル化を糸口とした多面的なサポートは、地域のつながりを絶やさず、新しい形で深める契機となりました。

【未知への期待と継続する歩み】

「平和を築く子どもたちを育むまちづくり」という一貫した理念のもと、私たちは多様な人々と価値観が交差する場を育み続けています。これから先、何が結びつき、どんな新たな展開が生まれるのかは未知数ですが、その「わからなさ」こそが活動のモチベーションです。新たな糸を紡ぎ、意外な出会いや発想が芽生える瞬間を探求しながら、私たちは着実に前へ進み続けていく所存です。



特定非営利活動法人 エクスプローラー北海道
代表理事 佐藤一美
<https://lit.link/satohitomihokkaido>